

排水門の「開門」で新局面へ!?

ルポ 諫早湾干拓と有明海の行方



ドキュメント写真家 早川文象

十四年前、ギロチンのように落ちた潮受け堤防で海から切り離された諫早湾奥部。その堤防の排水門が開けられることが決まったが、実際には反対運動もあって、ことは簡単に進みそうにない。開門を命じた福岡高裁の判決と首相の決断を受けて、状況はいま、どのように動いているのか。長年この問題を追ってきた早川氏が現地を取材した。

首相決断で「開門決定」のはずが

開門——。二〇一〇年十二月六日、福岡高裁は、諫早湾を閉め切った潮受け堤防の排水門を五年間常時開門することを命じた。この判決に対し、菅直人総理大臣は開門を決断、上告を見送った。高裁は、国が行なった

▲写真—小長井から見る北部排水門と潮受け堤防

干拓事業に伴う諫早湾の閉め切りと漁業被害の因果関係を認め、また、「堤防閉め切りは違法で、排水門を開けても防災面や干拓地農業への影響は限定的」であるとした。

有明海漁業の改善のため排水門開門を求めた漁民たち。その主張が三年前の佐賀地裁に続いて、福岡高裁でも認められたのだ。

これにより、農林水産省は長期開門調査を実施する方針を固めた。菅総理にしてみれば、政権の座に就く十年以上も前、諫早湾が閉め切られた直後から「無駄な公共事業」として諫早湾干拓事業に異を唱えてきたのだから、裁判所の判決を受け

入れることは当人の信条に則った判断でもあっただろう。

十四年前、潮受け堤防で閉め切られた諫早湾奥部。そこは防災目的の調整池として淡水化されたが、水質の悪化が改善されず漁業にも悪影響を及ぼしているとして、漁民たちが潮受け堤防排水門の開門を求めている。そして……。

民主党が政権を取り、鳩山内閣で農水大臣となった赤松広隆衆議院議員は、昨年四月末に政府・与党の諫早湾干拓事業検討委員会による報告書が示した「開門調査実施が適当」との意見を尊重すると表明したのだ。それより二カ月ほど前には、赤松

農水大臣は、長崎県知事選挙の応援のため訪れた雲仙市で、住民との対話集会に出席。ここでは地元の漁業者が排水門の開門を大臣に直接要望したのだった。地元の開門を求める

意見があることへの驚きをあらわにした赤松大臣。これは、国策である諫早湾干拓事業を推進してきた農水省や長崎県の役人たちが、苦境に立ち開門を望む漁民たちの声を切り捨て、「地元は干拓推進」という一面だけを為政者に伝えていたことの証だった。

「地元の漁業者の間に開門を望む声があるのは驚きだった」と語った赤松大臣は、漁民たちの声にも耳を傾け、事態は好転するかに思われた。農水大臣が開門の時期を公表するのにも時間の問題だと言われるまでになつていた。諫早湾の閉め切りから丸十三年にあたる昨年四月に開催されたシンポジウムでは、開門を求める漁民の裁判闘争を支え続けている弁護団の堀良一弁護士が、「ようやく目に見える形で開門が実現する。今後は、どういう方法で開門するかが

●はやかわ・ぶんぞつ

一九六四年千葉生まれ。法政大学卒業。海外取材の後、雲仙並置原発取材のため六年間島原市に居住し、被災地と人々の表情を写真誌に発表した。以後、日本最大の照葉樹林を横切る送電鉄塔建設問題を宮崎県綾町に取材し、本誌などに発表している。この諫早湾ルポは昨年七月号以来となる。